

らは、弥五島も近くなって、みんな助かっている。」

伊策は、お坊さんがどんなに苦勞して人々のために道をつくってくれたのかと、そのガマ岩を見に出かけました。ガマ岩をさがして、上ばかり見て歩いてきた伊策は、思わず足をふみはずし、がけの下にころがり落ちて氣を失ってしまいました。

どのくらいの間がたったのか、ぼんやりとした氣分が、だんだんはつきりしてくると、目の前に大きな岩が、かべのようにそびえ、目の前の水たまりに自分のげたがうかんでいました。

立ちあがろうとすると、からだじゅうが痛んで動けません。どうにか、がけをはいあがって道に出ましたが、肩かたから先が重く、頭がズキン、ズキンとするので、さわってみると血がにじんでいました。

夏の終わりの午後の太陽が照りつけ、せみがやかましいほど鳴きさわぐだけ